

芸術活動としての教育

第一次世界大戦直後、社会制度や政治制度は無残に崩れ去り、恐ろしい空虚感だけが残されました。世界は復興を求めています。シュタイナーの晩年一〇年間に、この危機を乗り越えるためのさまざまな意欲的で実践的な取り組みが人智学から生まれました。

シュツットガルトでウォドルフ・アストリアたばこの工場を経営していた実業者エミール・モルトはシュタイナーが労働者たちに対して行った講演の後、その子弟たちのために、もっとニーズにあった、よりよい人間性を備えるための学校開設を依頼しました。シュタイナーは、当時、革新的だと言える条件でモルト氏の依頼を受け入れました。男女共学であること、全生徒が同じ内容で総合学習的な授業内容を受けること、そして教師が学校経営・学級運営に関する最終的な決定をすることです。モルト氏の寛大なサポートを受け、シュタイナーは一九一九年シュツットガルトの工場近くに最初のウォドルフ学校を開校しました。

その九年後にはニューヨーク市にて北米で最初となるウォドルフ学校が開校されました。途中ナチスやボルシェビキによる迫害はあったものの、新たな学校が次々と開設され、ウォドルフ学校は世界で最大の無宗派教育運動の一つにまで成長しました。全世界六大陸にまたがり、学校数は九〇〇校以上、幼児期教育プログラムは一六〇〇以上を数えます。

シュタイナーによる人間と子供の成長に対する深い洞察、子供の発達段階によって変化する教師の役割、そして豊かで総合的な学習内容が、ウォドルフ学校における教授法の基礎となっています。シュタイナーは、子供たちは発達段階に応じて全く違った学び方をするとし、真の学習とは、ただ頭で考えるだけでなく、感じながら、そして自らの意志をもって少しずつ花開くべきだと考えました。シュタイナーと同時代の詩人で神秘主義者のウィリアム・バトラー・イェイツも、「教育というものは、バケツを水でいっぱいにするのではなく、火を点けることなのである。」という言葉を残しています。

幼い子供たちは、まず模倣と遊びを通して学び、イメージーションの琴線に触れたときに一番よく学ぶことができます。頭だけを使うような作業は、たとえまだ幼い子供ができたとしても、あるいは、真似ができたとしても、抽象的なとらえ方で高校の学習内容に活かすことができるようになる思春期頃まで、できるだけ先延ばしにすべきです。

認識力の基礎は遊びです。遊びを知らずに育った子供は後に、頭でっかちで、想像力にかけた大人になってしまいます。幼い子供たちは、体を動かしながらしっかりと意志を持って学んでゆきます。そして、思春期を経て感情が豊かに成長する際に、芸術が知識への扉となるのです。

シュタイナーは、さらに、真の学びは決して線上に順番に起こるのではなく、常に多面的であるとも言っています。無意識のうちに豊富な経験が熟し、後に全く別の能力として現れ出てくるのです。例えば、思春期に絵を描いたりしたことで得た芸術感覚は、大人になってからしっかりと判断ができる能力に変わるのだと説いています。

シュタイナーは、クラス担任は通常一年生から八年生まで（小学校一年生から中学二年生まで）の間変わらず、その後、数学、英語、生物と言った専門教科を専門の教師が教えるようにと述べています。クラス担任は、何をおいても受け持ちの生徒たちを熟知するようにとも述べています。ウォドルフ教育は、教師に多くを求め

ます。毎年新しい教材をしっかりと理解し授業を創造することはもちろんのこと、教師も生徒たちと一緒に成長するルネサンス人でなくてはならないのです。

シュタイナーは、教師は毎晩生徒の事、そして自分自身のことを振り返る必要があると言っています。シュタイナーの教育方法では、生徒への指導と同じくらい教師自身を高めることに比重が置かれます。教えることの要求が高いからこそ、教師は高い達成感を味わい、生徒たちとの関係は一生ものとなり得るのです。

シュタイナーは、最初に設立されたシュタイナー学校の教師たちに、次のようなモットーを贈りました。「敬意をもって子供たちを受け入れなさい。愛をもって子供たちに教えなさい。そして、自由の中に子供たちを送り出さない。」

ウオドルフ学校の学習内容は、宗教を敬い、世界と人類に対する敬虔な考えからできたものですが、病院が入院患者に解剖学や生理学を教えることがないように、いかなる特定の宗教あるいは精神的な考えを教えることはありません。

学習内容の核となるのは、シュタイナーの個体発生は系統発生が集約されているという思想です。つまり、個人の成長過程は 人類全体が歩んできた意識の進化が集約されている、ということなのです。幼い子供たちにとって、世界は魔法に満ちており、動物や植物や鉱物などに対して無条件で心を寄せます。また、さまざまな文化の典型的な神話やおとぎ話がこうした子供たちの意識を養う学習内容になっています。子供たちは三年生になるまでには半ば本当の意味での一神論者となり、六年生になるまでにはローマの法学者になるのです。自主性が目覚めるに従い、自分の中でルネサンスが起こることを経験します。シュタイナーは、その瞬間こそが学習内容全体の最も重要なポイントで、まさしく思春期がそれにあたり、大きな変革が起こると説いています。ウオドルフ教育は、今、生徒が発達段階のどこに位置しているかを把握しています。そして生徒たちが、これまでの体験と異なる体験をする時、新たな才能を開花することを確信しています。高校に入るところには、どんなに高度な思考力を要する課題に対しても自分の力でしっかりと対処できるようになっています。このようにして、ウオドルフ学校における学習内容は、「頭だけでなく、心や手を大いに使った伝統的でありながらも時代に則した教育を行っている学校で、『大学予備校』ではなく、『人生の準備学校』だと言えるのです。

新しい社会へ

ウオドルフ教育は今やシュタイナーの業績で最もよく知られているものとなりました。しかし、それはシュタイナーが目指した（これからも目指しうる）もっと大きな社会制度のほんの一部でしかありません。シュタイナーはこのことを「社会三層化論（社会有機体三分節化論）」と呼びました。シュタイナーが行った他の研究と同様、あらゆる分野を網羅しているため彼の社会的・政治的思考を簡潔に説明するのは至難の業です。シュタイナーによる自由放任資本主義に関する批評は、多くの点でカール・マルクスの視点と類似しています。たとえば、人は賃金のみ働くべきではないであるとか、苦役にしか感じられないような労働は疎外された労働であるといった点です。一方、シュタイナーは、政治の領域（シュタイナーはこれを「人権の分野」と呼んでいます）を経済と文化（これには宗教と教育が含まれます）から切り離して考えるという点からして古典自由主義的のようにも受け取れます。

シュタイナーは、第一次世界大戦後、主要な政治理論家、活動家として世に知られるようになりました。彼は、皇帝の敗北と退位によってできた（社会的・政治的）空白状況に足を踏み入れ、今であれば「第三主義」とでも呼ばれるいわば資本主義と共産主義の間点的な社会形態を主張しました。この考え方は後の一九六八年にシュタイナーの理論の影響を強く受けたプラハの春に見ることができます。シュタイナーは多くの著名人たちから署名を受けた宣言書を発行し、また、いくつもの評論や本も出版し、自身の考え方を世の中に知らせようとしていました。シュタイナーは、ドイツ中の労働者委員会に向けて講演会を行ったり、多くの人々に彼の考え方を指導したり、指導者を派遣したりして、自分の考えが広く知られるよう働きかけました。また、シレジア地方の新政権構想に関する国民投票を勝ち取るための大規模な政治キャンペーンも展開しました（最終的に敗北）。

他の急進的な政治的見解と同様、シュタイナーの政治的見解はフランス革命の「自由・平等・友愛」の思想に触発されたものでしたが、この思想は、誤解を招いたり、誤用されることも多くありました。しかし、シュタイナーは、利他主義（友愛）こそが経済界における指針であるべきだと主張し、それまでの社会理論を完全に転換します。この社会理論では、これまでにない労働の分離により、働けば働くほど、他人のために働くことになるため、理想とする利他主義が実現されるのです。利他主義の一番の実践形態とは「連携型経済」であるべきです。つまり、生産者と消費者が協議・協力しながら真に必要なものだけをできるだけ効率的に作るということです。

この良い例の一つが地域支援型農業です。これは消費者が一定額の会費などを前払いし、どういった農作物を栽培するか決定に関わり、農作業を分担するなど積極的に生産活動に関わり、異常気象や市場状況による豊作・不作のリスクを生産者と分担するというものです。

現在アメリカでは「地域支援型農業」は広く取り入れられていますが、シュタイナーの発想が原点となっており、人智学研究者たちによってアメリカで広められました。

「二つ目の分野」である権利と法に関しては、平等の法則でもって対処すべきだと述べています。シュタイナーは、まだ多くの人にとって民主主義というものがそれほど一般的でないときに、全く疑うことなく民主主義こそが唯一の適切な政治形態であると主張しました。平等の法則のあるところこそが政治の適切な位置付けであり、あくまでも政治の決定権は民主主義にのっとるべきであるとしていました。

またシュタイナーは、基本的人間の権利である労働だけでなく、その労働に対する賃金や、さらに驚くことに、貨幣や銀行が適正に循環することは、皆が公正に資本を分配されることだという考え方を展開しています。

シュタイナーの貨幣に関する考えは非常に面白いもので、例えば、貨幣を普遍的な交換商品としてではなく、権利認定証のようなものだとしています。また貨幣は三つの社会分野を抜本的に違う特性を示しながら循環するものだとも言っています。

シュタイナーにとって、資本というものは精神・文化的領域で起業家のアイデアとイニシアティブとして生まれ、権利（政治）の領域で貸付貨幣となり、さらに、その貸付貨幣は経済の領域では購入貨幣となります。最終的に、収入と利益がもたらされ、ローンを払い、教育機関や文化施設をサポートするために寄付されます。こうして、新たな循環が始まるのです。シュタイナーの考えを反映した人智銀行（持続可能な社会を目指す銀行）

がこの例として挙げられます。価値あるものをサポートする非営利団体のようなもので、中には、定期的にニュースレターを発行し、融資者が借入希望者のプロジェクト内容を理解し選べるよう推奨しているところもあります。

シュタイナーは、自由とは経済領域ではなく、精神・文化領域に存在するものであり、健全な社会秩序の中では企業ベースではなく、発想が自由に競合すべきだと言っています。これには学校や教会や美術館や大学やその他さまざまな機関が含まれますが、これらは皆、政治的・経済的圧力から守られるべきだと言っています。あらゆる文化が国家の中でそれぞれ開花すべきなのです。文化機関は寄付と自己運営のみで成り立つというのが理想的な形で、この領域では、各個人の創造力の可能性が最大限に引き出されることが最終目的です。学校は詰め込み、ましてや訓練するための場所ではなく、学びのための場所です。ウオドルフ学校の広まりは、こうしたことが実際に行われているという素晴らしい手本でもあるのです。

新たな文化の種

人智学は、シュタイナーの一生を通じ、また死後にもさまざまな影響を与え、新しい動きにつながっています。彼は、医者たちと協力し「人智学的医療」あるいは「相補的医療」と呼ばれる新たな医療の形を作り出しました。この取り組みは、北米ではあまり普及していませんが、ヨーロッパでは広く展開されており、人智学系の薬局や医院、そして総合病院も多く設立されています。ヴェレダとハウシュカは世界的にも知られた製薬会社で、ハウシュカは多くの人から最高の化粧品だという評価も得ています。米国においては、つい最近になってユーリエル薬局やトゥルーボタニカ社が設立されました。さらに、障がいのある子供や大人に対して人智学的視点に立った取り組みである「キャンプヒル運動」が国内外の何十もの地域で行われています。

シュタイナーは先見の明があったため、今でも私たちが頭を抱える多くの課題に対して解決策を挙げています。彼の社会理論は、現在論議されている国際化問題解決の鍵を握っているかもしれません。シュタイナーは第一次大戦に至った主な原因は「国家経済」という間違った観念にあると非難しました。彼は、経済は本来、非政治的で世界的規模であるべきだと唱えました。

また、熱心な男女同権主義者で、すでに一八九五年の段階で男女平等選挙権を主張し、「女性に関する質問は女性が答えるべきである。」と述べました。

シュタイナーは、さらに、当時ではまだ数少ない、高い意識を持つ生態学者の一人でした。シュタイナーは一世紀以上も前に、人類と地球との関係を癒す必要があると警鐘を鳴らし、それに応えるため、オーガニック農法の先駆者となり、今日では世界中で使われている「バイオダイナミック農法」を提唱しました。現在、北米では三〇州でバイオダイナミック農場が生まれ、いくつものぶどう園がバイオダイナミック生産方法に切り替えています。このバイオダイナミックの考え方はウオドルフ教育と同じく急速に広まっています。そのため、人智学は有機農業という一分野だけではなく環境運動全体に理論と実践の両方を提供できるのではないかと言われています。

シュタイナーの考え方をビジネスの世界に応用する試みも見られます。例えば、マーレやアルナトゥーラやソフトウェアAGなどと言った主要欧州系企業は人智学の思想を基に創立され、さまざまな面で人智学の原理に則した経営が行われています。また、ソーシャルレンディングという新興分野においても人智学系のビジネスは長期にわたる成功を収めています（米国ではサンフランシスコのRSF銀行がその一例）。

マルクス主義や国家主義、マテリアリズム、宗教的原理主義、そして市場経済における見えざる手などと言ったイデオロギーの多くが陳腐化、あるいは有害化してしまった世界において、今までとは全く違った考え方や、新しいアイデアや、実際に社会に変化をもたらすような力の出現が待ち望まれています。多くの人々が真の理想となるような考え方を切望しているのです。シュタイナーは私たちにそのようなアイデアを数えきれないほど残していきましました。それは、世界で展開されている人智系の取り組みを通じてうかがうことができます。

百年たった今でも人智学は新鮮で、シュタイナーは現在でも大きな影響を与え続けています。彼は慈愛深い新種の種をまいてくれたのです。それを私たちが育て、収穫しようではありませんか。